

二

更に考へるに、個人よりも社會よりも一層實在性に富むものは兩者の關係其ものである。此關係は個人と社會とを産出するものである。別に言へば、個人をして眞の個人たらしめ、社會をして眞の社會たらしめるものは此關係である。社會を離れた個人は事實存することなく、個人を離れた社會も亦事實存することがない。社會と個人とを引離して立言するのは、理論的必要に出づるのでなければ、即ち實際的便宜に出づるのである。さて、個人に取つて最も本質的なものは人格である。此人格が如何にして成立つぞと云ふに、それは個人と社會との關係に基いて成立つのである。言ふ迄もなく、個人には物質的側面と精神的側面とがある。或は之を物質人と精神人と言うてもよいかも知れない。人或は物質人が一見、社會から離在するやうに見える所から

精神人も亦同じく社會から獨立なものと思惟するけれども、此見方の誤つて居ることは一人の典型的個人を捉へて、其思想なり信仰なりを檢して見れば、それらは何れも社會的内容を有することを見て之を知ることが出来る。恰も物質人を組立てる材料は悉く自然界に存し、獨り物質人に存して自然界に存せぬものは全く存しないやうに、精神人を組立てる材料も悉く社會に存し、獨り精神人に存して、社會に存せぬものは全然ないのである。

人格は個人の有する諸々の可能性を統一する力を有する。人格内容の充實の程度如何を見て、個人と社會との關係の深さが知られるのである。個人は社會を離れては嚴正な意味に於ける個人ではなく、社會の部分となつて初めて十全な意味の個人たるのである。更に言へば、社會の缺くまじき部分たる所に、個人には其存在の理由が確實となるのである。此意味に於ける個人が即ち公民である。政治、法律、經濟等は主として公民の外廓を整へ、知識、道德、藝術、宗教等は其内面を整へるのである。公民教育に於ては政治、法律、經濟等

の必要であるが如く、哲學、科學、倫理、藝術、宗教等も亦必要である。個人と社會との關係を傷つけ、人格内容の充實を妨げ、以て人格の諸々の可能性に對する統一を傷ける行爲を倫理的罪惡とする。倫理的罪惡は其儘で人格的罪惡である。此種の罪惡は主として個人内面の不備に基つるのである。

三

個人の人格内容は彼と他の個人否、自他の個人を包含する社會と關係する所に初めて充實して來る。此點から言へば、個人と社會との間に存する關係は矢張り創造である。創造は人格生活の根本的事實であつて、同時にまた根本的法則である。創造的活動の中で最も複雑なる、又最も深奥なるものは人生其ものである。單に外面的に此人生を眺めて、之を種々の活動様式に分ち、之を各個人に割當てるやうなことは徒に人生を斷片たらしめ、其概念を貧弱な

らしめ、従つて人生の意義と價值とを没却することになつてしまふ。思ふに、人生は宇宙の根本原理が自らを展開する壯麗なシーンの一部である。宇宙の根本原理の極めて微妙な、又極めて雄大な自己展開の状態は此人生を通して明かに之を窺ひ知ることが出来る。何故となれば、一切萬象の中、此人生程高尚に、複雑にまた目的的なものはないからである。

單獨な個人よりも更に實在性に富むものは一つの人格と他のそれとの關係である。此關係は機械的のものではなくて有機的のものである。我々の人格は有機的に關係して互に其内容を充實し合ふのである。此點から言へば、社會は數多の個人から成立つものであると言ふよりも、寧ろ數多の人格から成立つものであると言ふことが更に適切である。數多の人格は社會的道程を辿つて結合し、社會的道程の中に自己を發展させて行くのである。互に關係せぬ人格は反社會的のものであり、互に結合せぬ人格は單に偶然的のものである。孤立した人格は是が所有者をして常に社會の埒外に出でしめ、若

しそれが社會の中にあれば社會の動搖、解體、若しくは混沌を招來する外はない。彼の危険思想の所有者の人格を見るべきである。之に反して、創造性に富む人格は社會に適應し、其機構を固くし、其健全性に培ふのである。されば人をして社會的價値を備へさせるものは其拒斥性ではなくて其適應性である。孤獨性ではなくて關係性である。公民教育は學徒をして此適應性、此關係性に目覺めさせる手續に外ならない。

種類の如何を問はず、己が長ずる所を以て社會に奉仕するのは個人の特殊性ではなくて、其特殊性を社會に關與させる關係である。彼に取つて社會はいはば其長技を振ふ舞臺である。従つて此處にも亦關係なるもの重要な意義が窺知せられるのである。此際、此特殊性の價値は是が所有者がよく全體の部分たる所に成立つのである。ために彼は單獨の人として狭き生活、淋しき生活を遂げる代りに、社會の一員として、より廣き生活、より深き生活を遂げるのである。人は社會の一員として社會との關係を親密ならしむるに従

ひ、社會を背景として自己を確立することが出来るのである。社會を背景として自己を確立する以上は、社會のあらん限り亡びないであらう。之を人格の不死と言ふのである。此故に苟も爲すある人格は、常に全體の有力な部分となり、全體に於て己が著くべき正當の坐席を見出すのである。己が正當の坐席は茲に坐するものに社會を與へるのである。人は己が坐席を通して社會に奉仕する所に初めて社會人たることが出来るのである。社會人とは己れの善が其儘で社會の善となり、己れの生命が其儘で社會の生命となるものである。公民たるものは宜しく此社會人たるべきである。此點で社會的正義が公民の主徳となつて來る。何故ぞと言へば、それは各人が共存の原則を守つて其著くべき坐席に著き、互に相侵すことのない態度であるからである。

四

全體へと向ひ、全體のために行動しつゝある個人の精神は、社會の進歩、發展の原動力たるものである。而して此精神は、臆て自己を完成するものである。さて、社會の中にあつては、與へることが却つて受けることであり、取ることが却つて奪はれることである。されば忠實な社會奉仕者は、確實に自己完成の途を辿るものである。従つて社會への貢獻はおのづから自己への貢獻であつて、社會への無責任はまた自から自己への無責任である。主我主義は誤つた社會觀の上に立つものであつて、少しも我々の指導原理たる價值を有たない。何となれば、それは勢ひ社會の各員を引離し、其機構を弛めるものであるからである。之に反して、普汎主義は秩序ある全體を存立させ、社會の統一を支持するのである。此處にも公民教育に關する尊い示唆が發見せられる。

社會を組立てる個人の職能は關係的であり、其關係は殆ど際限なく廣がつて行くものであれば、個人は考へ方に依つては同時に社會たるのである。斯くは言ふものの、社會の全體は個人と言ふ數多の斷片に分たれると言ふ意味

ではない。個人は部分に現れた全體であると言ふ意味である。個人はいはば全體の表現である。個人の生命は一人に流れる全體の生命である。個人の精神は一人に漲る全體の精神である。社會を組立てる個人の生の充實の程度は、其社會的行動の分量に依つて測定することは出来ない。唯全體が個人を通して如何に表現せらるるかに依つて初めて測定せられる。是に至つて、社會に於ける個人の價値は、彼が社會の價値ある部分たる所に存すると言ふのみでは足りない。彼の價値は特殊の點から見た全體たる所に存すると言はねばならない。公民の望ましき姿相は茲にあつて存する。

すべて流動の姿に於て事物を把握し、従つて部分の全體に對する關係を靜的のものとなし、之を動的のものとすることは、恐らく現代の哲學並に科學の我々に教へる不動の眞理でなければならぬ。一人の個人が其對社會の義務を果すことは、實際、社會の特殊の要求を充たすよりもより多くのものを社會に與へるのである。何となれば、それが社會の生命に培つて社會の止

揚的契機に或物を與へるからである。社會が個人に對して保護の任務を完了することは、單に個人當面の必要に應ずるのみではない。何故となれば、それは個人の生命其ものに培つて個人の創造性に何物かを寄與するからである。個人と社會との交互的關係は之を措いて外に存しない。公民教育は常に社會の止揚的契機に多くのものを與へ得る個人を養成せなければならぬ。「天下は一人を以て興る」とは眞である。若し一人が其割當てられた任務の遂行を怠る時は、それが其人一人の分前よりか更により多くを社會に向つて惜むこととなるのである。何となれば、それはそれだけ社會の當然養ふべき止揚的契機を養ひ得ぬからである。「天下は一人を以て亡ぶ」と言ふも亦眞である。此考へ方は公民の責任感に強き刺戟を與へて來る。

五

個人は離在、孤獨、拒斥等の事實ではない。それは社會と云ふ全體に於て初めて己が存在と價值とを見出す所の部分である。其正しき生は社會完成の肯定である。個人が其人格を完成することと、社會が自らを完成することは結局、同一である。個人創造は體がて社會創造である。個人の呼吸は社會のそれであり、個人の脈搏はまた社會のそれである。茲に個人を生きた部分とする全體から發する力、權威が認められる。全體は常に部分を保護し、部分を支持するけれども、是は部分が常に全體を創造せねば不可能のことである。此完全な交互作用が社會存立の理由であつて、また個人存立のそれである。公民教育は個人と社會との間に此交互作用を成立たしめる目的的手續に外ならない。公民教育の輕視は社會の自殺である。

固と人格は其屬性の一として原因性を有して居る。茲に原因性とは特定の事物の原因たり得る性質を意味する。人格の有する此屬性の主なるものに創造性がある。然らば、人格は果して如何なるものを創造するぞと言ふに、

それは是が持主の思想を創造する。即ち諸々の事物を認識して之に關する思想を創造するのである。また人格は此思想を外部に表現する所以の行爲を創造する。人間行爲の殆んど凡ては其頭腦内の思想の外的表現に外ならないのである。されば人格は思想と行爲との原因たるものである。さて、思想と行爲とを除いては、少くとも文化人の自我は存せぬのであるから、人格は結局文化人の自我を創造するものと言ふべきである。人格の有する原因性は自我創造の力を備へて居るのである。

人格の創造と機械の營む製造との間には著しい相違がある。無心の機械は外部から動力を受取つて初めて其作用を開始するのであるが、人格は自ら働出して自我を創造するのである。即ち活動の理由が己が内部に存するのである。機械の作用は所動的のものであるが、人格のそれは能動的のものである。また機械は無意識的に働いて諸々の貨物を創造するのであるが、之に反して、人格は意識的に働いて文化人の自我を創造するのである。また機械

は之を使用すれば次第に消磨するが、人格は之を働かせれば益々發展するのである。由つて考へれば、人格は是が所有者の自我の自發的意識的創造の主體である。人格を動的に把握すれば、それは文化人の自我創造の主體たるのである。蓋し、人の人たる意義と價值とは生の單なる遂行には存しないで、常に新しい自我を創造し、新しい意義、新しい價值を己れに賦與する所に存するのである。人格は其創造作用に依つて常に是が所有者の生を展開して、後に過去を残し、前に未來に面せしめるのである。ために我々は新しい經驗を遂げ、日毎に新しい生を營むことが出来る。思ふに是が人格本來の面目である。人間の精神的生活の代表的意義は此事實を措いて他に存せない。己が新生の打開こそは人格の根本作用である。己が身體を生んだものは父母であるが、己が文化的自我を生んだものは己が人格である。人格は是が所有者をして己れを存在せしむるものである。されば我々に取つて己が人格程尊いものはない。それは何等かの條件の下に尊いのではなくて、我々をして存在せ

しむると言ふ意味で尊いのである。而して自重、自尊は人格の最も健全なる態度である。

六

斯様にして人格は能動的に是が所有者の自我を創造して、彼をして日毎に新しい経験を遂げ、新しい生を遂げさせるのである。しかし、人の昨日の自我と今日のそれとの間には一定の關聯が存する。人格は昨日の自我を展開して今日の自我とするけれども、是が所有者の生其ものの根軸は昨日の自我と今日のそれとを一貫して居るのである。従つて今日の生は昨日のその繼續であつて、明日の生は今日のその延長である。之を人格の一貫性と呼ぶのである。而かも昨日の自我と今日のそれとの間に展開が行はれる所から、今日の自我に一段の新味が加つて、昨日の自我からハッキリ區別せられるの

である。言葉を換へれば、己が生活の上に過去と現在と言ふ時間的區劃が成立つのである。之と等しく、今日の自我を展開して明日のそれが出来、其處にまた現在と未來と言ふ時間的區劃が成立つのである。此故に人格には一定の歴史が伴隨する。人格的生活は其儘で歴史的生活である。而して此間、常に意識が伴つて居る。即ち己が生の過現未三際を通じて一筋の意識が流れて居る。過現未三際に通ずる自我創造は常に意識的に行はれる。人格の持主たる人間は意識的に己が歴史を作りつゝ前進する。此故に我々は現在に生きるに當つて、一方に過去を顧み、他方に未來を考へねばならぬ。眞の人格的生活にあつては、單に過去のみ重んずることの無意義であるが如く、又單に未來にのみ心を奪はれることも等しく無意義である。一方に過去を重んじ、他方に未來を慮かることが人格的生活の健全な態度である。此點が人間と動物との間に存する著しい差異の一である。動物の生活には單に現在があるのみであつて、彼等は日毎に同様の生活を反覆して居るのみである。た

めに今日の生を昨日のそれに較べるに些の新味も加つて居ない。是れ彼等が新我創造の主體たる人格を有せぬからである。従つて彼等には過現未三際に通ずる自我創造は存せない。別に言へば、歴史が存せない。勿論、客觀的には彼等にも歴史があるけれども、主觀的には、即ち意識的にはそれが無い。動物の有する歴史は、動物が意識的に作つたものではない。之に反して、人間は意識的に、自發的に人格的生活、歴史的生活を遂げるのである。是が人生特有の意義でありまた特有の價値である。

七

自發的創造性を有する人格の持主が、目的的に反省的に社會生活を遂げると言ふと、それが纏て社會を創造することになる。人間の目的的反省的な自我創造が社會内に於て營まれるときは、それが其儘で社會創造となるのである。

是れ私が曩に個人以前には社會が存しない。社會は個人の一種の作品であると言つた所以である。

此故に、個人が其社會生活の下に己が人格を完成することは、纏て社會其ものを完成することである。人格完成と社會完成とは結局、同一事であればならない。それ〴〵の個人は主觀的には人的個體であつて、單獨に存在するけれども、客觀的には他の人的個體と共に社會を組立て、社會生活を遂げつつあるのである。是れ人格完成と社會完成と相即する所以である。固より個人には主我心があつて、或は他人の權利を蹂躪し、或は其要求を無視して、反社會的行爲に出づることのあるのは事實である。けれども、社會の力はよく此主我心を抑へ、此反社會的行爲に抵抗して、彼をして遂に社會に適應させ、社會のために小なる自我を抑へて大いなる自我に生きさせるのである。されば個人の行爲が眞に善であれば、それが同時に社會の善である。個人の道徳的活動が眞に己が人格を完成する所以のものであれば、それは同時に社會を完

成するのである。否、人は己が善が同時に社會の善なる底の行爲を遂げるのでなければ、決して己が人格を完成することは出来ない。社會は斯様な個人を其構成要素とするのでなければ、決してまた自らを完成することが出来ない。公共善と一致する個人善を外にして世に個人善なく、社會完成と一致する人格完成を外にして世に人格完成はないのである。眞の意義に於ける公民は此種の善を遂行する能力の所有者でなければならぬ。

此故に、己れの善とする所が社會の善となることの確實さを加ふるに従つて、別に言へば、己れの善が普汎性を増すに従つて、是が主體たるものの生の倫理的價値は増して來るのである。即ち人の生の倫理的價値は其以て善とするものの普汎性を吟味すれば略々之を窺ひ知ることが出来る。彼の一舉手、一投足が天下の則となる行爲と、淺ましい主我心から出發して淺ましい行爲に出で、遂に自ら己れを葬むる墓穴を穿つ場合とを比較すると、直に此理を知ることが出来る。

若し上來述べ來つた所に主義と云ふ名稱を與へることが出来るならば、社會的人格主義と言ふべきである。社會的人格主義は、人格をば意識的一貫性を以て其心理的特色となし、價值的統一性を以て其倫理的特色となすものとなし、此人格を中心として社會生活をなすべきことを主張する立場である。別に言へば、個人よりも社會よりも一層實在性に富むものは兩者の關係其ものであるとなして、人格完成即社會完成を主張する立場である。公民教育は此社會的人格主義を指導原理として行はれて、初めて其目的を達することが出来ると信ずる。

結 言

公民倫理の對象は勿論、以上で盡きては居らぬ。今は唯、特に主要なるもののみを擧げたに過ぎない。けれども、若し本書に論述した所が効果的に取扱

はれるならば、我公民教育は其不動の基礎を得るに庶幾きことは、著者の信じて疑はぬ所である。我同胞國民は社會的共同生活の點に於ても、將又立憲自治の生活の點に於ても、未だ少からず自省、自戒の餘地を存する。眼前の我帝國は、日本精神の高唱の必要なるほど公民精神の高唱が必要である。公民科擔當の教師諸彦には、それ々の學校に於て公民科が新に設けられた旨趣に徹して、日に日に新なる祖國國運の進展に寄與せられんことを切望する次第である。

昭和十四年五月十五日増補改訂印刷
昭和十四年五月二十日増補改訂發行

公民倫理概論

定價參圓

著者 深 作 安 文

發行者 東京市小石川區竹早町三七
尼 子 靜

印刷者 東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七
吉 原 良 三



發行所

東京市小石川區
竹早町三五

モナス

振替東京六三八五四番
電話小石川五四四六番

大日本學術協會編

四判 二〇頁裝

定價二・〇〇
送料一・二四

國民道德教育大意要義

內容 前編 國民道德要領 第一章 國民道德の概念及性質 第二章 國民道德の發達及成因 第三章 國家及國民生活と國民道德 第四章 我國特有の國民道德 第五章 現代思想と國民道德 第六章 教育勅語と國民道德 第七章 戊申證書と國民道德 第八章 國精神作興詔書と國民道德 第九章 朝見御儀勅語と國民道德 第十章 國民道德の實踐問題

後編 教育大意 第一章 教育及教育學の本質 第二章 教育目的論 第三章 教授論 第四章 訓練論 第五章 養護論 第六章 心理及論理 第七章 教育行政管理法 第八章 教育史

スナモ

四五八三六京東替振
六四四五川石小話電

區川石小市京東
五三町早竹

989
158

終

